

## 「社会が変わる 学校が変わる」 — ICT を活用した個別最適な学びを提供するために —

あけましておめでとうございます。56年ぶり2度目の東京オリンピック・パラリンピックが開催される記念すべき年、そして、いよいよ小学校で新学習指導要領がスタートし「新しい学び」の実現を目指す重要な年が明けました。皆様、健やかに新年を迎えられたことと心よりお喜び申し上げます。

昨年は、4月に美園北小学校、美園南中学校そして県内初の中等教育学校である大宮国際中等教育学校の3校が開校し、小学校から高等学校までの市立学校全169校で約10万3000人の児童生徒が、生き生きと学びその力を大いに発揮しました。原山中学校サッカー部は、埼玉県代表として第50回全国中学校サッカー大会に出場し第5位、田島中学校、指扇中学校は柔道、土屋中学校は水泳、大宮北高校、大成中学校、南浦和中学校、白幡中学校は陸上競技において全国大会入賞を果たしました。文化面でも、市立浦和高校が第13回全国高校生英語ディベート大会で第5位、宮原中学校が第72回全日本合唱コンクールで金賞、大宮北高校、泰平中学校、大宮南小学校の吹奏楽部等による全国大会出場等、例年にも増して本市の子どもたちの目覚ましい活躍が見られました。

全国学力・学習状況調査では平成19年の開始以来毎回、実施教科すべてにおいて全国平均を上回る結果を示し、本年度初めて実施された「中学校英語」では、47都道府県20政令市の67自治体で全国第1位となり、学校教育の着実な前進が確認できました。

また、生涯学習事業におきましても、5月には新大宮図書館のオープン、11月には青少年宇宙科学館にて「宇宙のまち さいたま」を宣言、そして同日に来館者400万人突破、片柳公民館の文部科学省優良公民館表彰受賞など、着々と成果を上げてまいりました。皆様のご尽力、ご協力に改めて感謝申し上げます。

さて、教育界全体を見渡しますと、昨年末、矢継ぎ早に三つの大きなニュースが報道されました。

一つ目は、2020年度から実施予定の大学入学共通テストにおいて改革の二本柱だった「英語4技能の民間試験活用」と「国語・数学の記述式問題導入」が見送りになったという衝撃的なニュースです。「新学習指導要領」の本格実施と並ぶ重要な教育改革の一つが迷走してしまったことは大変残念ですが、英語4技能や、論理的に考え表現する力は、未来社会を生きる子どもたちにとって依然として必要不可欠な力であり、改革の方向性は正しいという事実を再確認しておかなければなりません。今後どのような展開になるのか、検討が待たれるところですが、50万人を超える受験生の公平性を担保する手段としてCBT（Computer Based Testing）の導入が大きなカギを握ることになるのではと予想されます。

二つ目は、経済協力開発機構（OECD）が発表した、2018年の「国際学習到達度調査（PISA）」で、日本は「読解力」が15位になったという報告です。公開問題を見てみますと、ブログ、書評、オンライン科学雑誌の記事という3種類の文章を、パソコン画面で読み、キーボード入力で解答するコンピュータ方式になっています。内容は、情報の信憑性を見極める問題や、複数の文章を比較し、根拠を示して自分の考えを説明する問題などが並んでいます。PISAがいう「読解力」は、日本の国語教育における「読解力」とはニュアンスが違い、教科横断

的な概念の上に成り立つものであることがわかります。

そして三つ目は、「GIGA スクール構想」です。これは、2023 年度までに義務教育段階にある児童生徒 1 人 1 台の情報端末、および高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない個別最適化された学びを全国の学校で実現させようという政府方針です。私は、教諭時代より、多くの子どもたちを北米、オセアニア、アジア諸国に引率し、諸外国の教育環境を見てまいりましたが、日本の学校の ICT インフラ整備は甚だしく遅れていることを痛感しておりました。「GIGA スクール構想」は、日本の学びを一変させるために必須であると感じています。

これら 3 つの大きな動きには、共通の課題が顕在しています。それは、学校現場が「ICT を活用した学びの改革」にどれだけ本気で取り組めるかです。

インターネットもパソコンもなかった時代には、子どもたちが教室で一律の内容を一斉に学ぶスタイルが最も効率的な指導方法でした。子どもたちは、同じ年齢の子どもたちと互いに切磋琢磨しながら、知識を得て、考え方を学び、他者との協調のあり方も身に付けて成長してきました。そうした教育が、戦後日本の成功と安定した社会運営を支えてきたことは間違いありません。しかし、時代は変わりました。デジタル技術が社会を大きく変える中で、私たちは、それに呼応した新しい教育のあり方を構築していかなければなりません。

文部科学省の掲げた「Society 5.0 に向けた人材育成」では、AI 等と共存し、AI 等を使いこなしていくためには「文章や情報を正確に読み解き対話する力」「科学的に思考し活用する力」「新しい価値を見つけ出す感性と力、好奇心・探求力」が必要であると述べられています。そして、このような力をはぐくむためには、学校は、これまでの一斉一律の授業のみならず、子どもたち一人ひとりの個性や特徴、興味関心や学習の到達度が異なることを前提にして、各自にとって最適で自立的な学習機会を提供していくことが求められます。

私は、教育長を拝命し 2 年半が過ぎました。この間約 200 回の学校訪問をさせていただき、どの学校もどの先生も、献身的に教育活動を実践されている姿を拝見しました。しかし、社会変化に伴い求められる学びも変化していることを認識しているか、そしてその変化に対応するための授業を展開しているかについては、学校間や個人の差も大きく、さいたま市教育全体としても議論の緒に就いたところであると言わざるを得ません。2020 年は、6300 人の教職員全員で「社会変化に対応するさいたま市の学び」について熟議を重ねてまいりたいと思います。

「パーソナルコンピュータの父」と呼ばれるアラン・ケイ (Alan Kay) という科学者は、このように言っています。「未来はあらかじめ引かれた路線の延長線上にあるものじゃない。それは、我々が望むような方向に作り上げることができるものなんだ。」

私たち一人ひとりには微力ではありますが、無力ではありません。私たちが、つながら、協働したとき、課題解決の糸口が見え、子どもたち一人ひとりの個別最適な学びが創造されます。

私は、皆様とともに「日本一の教育都市」実現のため人生を投影する仕事をしてまいりたいと存じます。本年も、どうぞよろしく願いいたします。

令和 2 年 1 月 6 日  
教育長 細田 眞由美